

「しづおか葵プレミアム・アワード」に選ばれた「SENSEハミング」シリーズのけた



## げた現代風にアレンジ

同社の創業は昭和12年。当時のけた製造は分業制が主流で、同社はけた木地の製作を手掛けていた。戦後、けたの需要が減ると、サンダルの中底作りにシフト。しかし、昭和の終わりころにはサンダルの中底作りだけでは経営の先行きが見通せなくなり、水鳥正志社長の鐘の一聲で原点回帰を目指し、再びけた

作りに挑戦することになった。けたになじみのない人が増えているため、同社がます考えたのが「足にフィットするけた」を作ろうということ。当初はこれまで通り木地だけを製造しメークーに売り込むつもりだったが、メーカー側が「今どきけたなんて売れない」と取り合ってくれず、「だったら自分たちで

静岡市民が「100年先まで大切に残していくたい商品」を選ぶ「しづおか葵プレミアム・アワード」で「水鳥工業」(同市葵区)の「SENSEハミング」シリーズのけたが審査員特別賞を受賞した。同市は駿府城の造営などのため徳川家康が木工などを手掛ける職人を全国から呼び集めて以来、けたなどの木製品の製造が盛ん。履物の主流が靴となつた今も同社は伝統的なけたを現代風にアレンジした商品を世に送り出し続けており、国内外で人気を集めている。

(吉沢智美、写真も)

### 履き心地や歩きやすさ追求

### 静岡市のアワードで特別賞

「から作ろう」と完成品の製作に乗り出すことになったのだという。  
「最初は社長自らが工場の片隅で細々とけた作りを始めたと聞いている」と同社広報担当の島田文美さん。平成21年度に静岡産のヒノキを使ったシンプルなデザインが特徴の「茶人」シリーズのけたが、市が市内の優れた地場産品を認証する「しづおか葵プレミアム」を受賞するところからはじめたの製造一本で経営が成り立つまでになつた。

同社の製造するけたはこれまでのサンダル製造で培った技術を応用し、木地に足型を乗せた上で鼻緒を取り付けるなど、履き心地や歩きやすさに配慮しているのが特長。女性客の中には同じシリーズのけたを鼻緒を違いにして複数購入する人もいる

るほか、外国人観光客にも人気で、今では米国やフランスのショッピングでも同社のけたが売られているという。

同社のけたは26年度にしづおか葵プレミアムが休止されるまで、5年連続で同賞を受賞。29年度に仕組みを一部変えて再開されたしづおか葵プレミアム・アワードを受賞した「SENSEハミング」シリーズは女性の足がきれいに見える高さ約6.5cmのヒールが付いた商品で、ヒールがあながらとも歩きやすいと評判だ。

同社では今後も履き心地を意識した商品を開発していく考えで、広報担当の島田さんは「特別な日にとかではなく、毎日履いてほしい。今の季節は素足で履いて、ネイルと鼻緒の柄合わせなどを楽しんでもらえた」と話している。